

## これまでの経緯

(参考資料①)

- 「一時保護の判断に資するAIツール」として、令和4年度より設計開発をスタートさせ、令和5年度末にプロトタイプがほぼ完成。  
【ツール概要】 所定のアセスメント項目に対する該当有無の情報をインプットし、「一時保護スコア」「再発スコア」等をアウトプットするAIツール。
- 試行実施自治体より、現場での活用が難しいのではないかという意見が寄せられた。  
入力項目の多さやAIが算出するスコアに疑義が生じる等があるとの懸念。こども家庭庁内でも検証を実施し、同様の意見を確認。
- 外部有識者を交えた検討会を立ち上げ、調査研究事業により当該ツールの効果検証を実施。  
併行して、児童相談所におけるAI活用の長期的な将来像も検討。

## 効果検証の概要

- 計10自治体※の児童相談所にご協力いただき、過去の実事例：100ケースで試行検証を実施。（※都道府県、政令市、中核市、特別区）

### 【検証結果】 約6割のケースでスコアに疑義が生じた。

AIが算出した一時保護スコアに対して、日常的に一時保護判断を行っている各児相の幹部クラスの所感として、100件中、13件で「高い」、41件で「低い」、8件で「スコアの幅が広くて判断に活用できない」という評価）。

### 【結果分析】 保護判断に影響する情報を正しくインプットすることが難しいケースのスコアに疑義。 (参考資料②)

- ✓ アセスメント項目に発生事象や環境に該当する項目がない。
- ✓ 該当項目は存在するが、有無のみを記入するため程度や範囲が反映できていない。

### 【具体事例】 ベテラン児福司が「ただちに一時保護すべき」と判断する事例に対して重大な見落としも発生。

当該ケースでは「母に半殺し以上のことをされた」等という児の訴えや、服をつかまれ床に頭部を叩きつけられたり殴る蹴るがあったが、痣として残らなかった等により勘案されず、一時保護判断時点で得ていたケース情報（定性情報）を項目該当チェックに落とし込めなかった。（著しく低い一時保護スコア（2～3/100）を判定）

### 外部有識者を交えた検討会の考察

- 事前に定められた一定の項目の該当有無だけでは、リスクスコアを算出する情報として十分ではないが、これ以上の項目追加は入力負荷の観点から現実的ではない。
  - ✓ 所定の項目の入力（及び入力内容の妥当性判断）に、一定程度の時間を要するうえに、所定の項目以外にも一時保護判断に影響する情報は非常に多岐にわたって存在し、それらを全て項目化することは非現実的である。
  - ✓ また、項目それぞれに対して「程度」が存在しており、各項目の該当可否だけでは、虐待リスクを算出する情報として不足している。
  - ✓ AIツールが算出するスコアは、一時保護判断における一つの材料であり、最終的な判断は「人（児童相談所職員）」が行う前提であるが、国が全国に画一的に提供するツールであることを鑑みると、ツール単独でのスコア判定精度がより重要だと考えられることから、今回国が開発したAIツールのリリースは時期尚早だといえる。

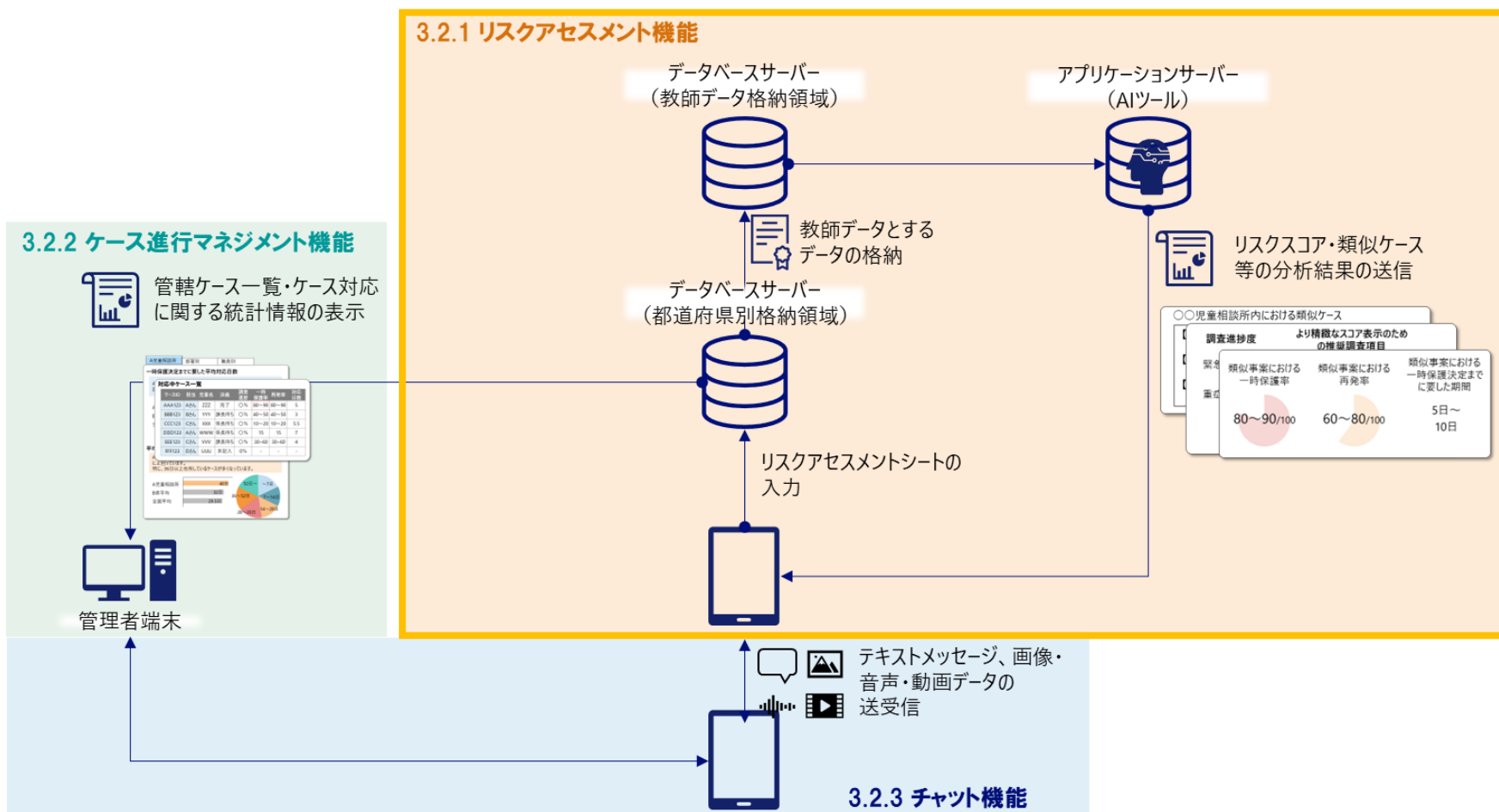
### 今後の方針

- 開発したAIツールは、AI技術の更なる進歩を踏まえた性能改良が必要であるため、現状でのリリースを延期する。
  - ✓ 効果検証結果及び有識者からの見解を踏まえ、現段階で本ツールを全国にリリースしても活用される可能性は低く、AIツール単独での判定精度が十分とはいえないため、かえって誤った判断を招くリスクも抱えている。
  - ✓ 一時保護判断という、こどもの生命を左右する場面で活用されるツールであり、こどもに不利益が生じるリスクがあってはならないため、リリースを延期する。
- 定性情報（自然文）を学習データとするAIに進化させ、ケースワークの多面的なサポートを目指す。
  - ✓ 今回の調査研究においては、効果検証と並行して、「児相におけるAI活用のあり方」についても、有識者と議論を行っているところ。
  - ✓ 長期的なAI活用ビジョンとしては、定型項目（例：あざの有無等）の該当有無に加え、非定型の情報（例：児童記録票や経過記録の文字情報等）を学習できるAI技術が確立されれば、AIが児童福祉司の複雑なケースワークを多面的にサポート（アラートや提案を行う等）できる可能性もあり、それらを踏まえ、児童相談所におけるAIの活用について整理していく必要がある。
- R6補正予算案にて「面談音声マイニング及びAI要約ツールの開発」を行うための予算を要求。
  - ✓ このAI要約ツールが現場で活用されれば、記録負担の6～7割程度の軽減が見込め、さらに、経過記録等の標準化された文章データを収集することも実現できる。

# 参考資料

## 参考資料①：一時保護AIツールの概要（システム構成）

一時保護AIツールは、入手したケース情報を基にリスクアセスメント項目に入力を行うことで、リスクスコア等を提示するシステムである。



## 参考資料②：AIツールへ正しく情報を入力できなかったケース具体例

正しく入力できなかった状況として、①発生事象や環境に該当する項目がないケース、②該当項目はあるが程度・範囲が反映できていないケースの2パターンが存在する。

### ①発生事象や環境に該当する項目がない

ケースにおける重要な事象や対応方針（一時保護判断）を決定するにあたって重視した児童・養育者・支援者等の情報として**該当するアセスメント項目がなく**、ツールに情報を与えられていない場合

#### 検証ケースにおいて生じた例

##### 体重減少

重篤なネグレクトで体重減少がみられるが2SDには該当しない

##### 墜落分娩

出産まで妊娠に気がつかず、自宅のトイレで出産したが児童の健康状態に問題はない

##### 親の過干渉

こどもの年齢に不釣り合いな干渉や支配性がある

##### 養育者に対する怯え

（保護を求めているなくとも）こどもが養育者に対しておびえている

##### こどもの発達年齢

発達・情緒に問題を抱える場合など実年齢と比較して意見表明が難しい/発言が不明瞭である

##### 支援者の状況・分離

家庭内に支援者がいる、家庭以外（祖父母宅等）で分離ができる

### ②該当項目はあるが、程度・範囲が適切に反映できていない

ケースにおける重要な事象や対応方針を決定するにあたって重視した情報に該当するアセスメント項目自体は存在するものの、アセスメント項目に該当する場合が広範で、**程度や範囲が適切に反映されていない場合**

#### 検証ケースにおいて生じた例

##### 受傷の程度

傷あざややけどの範囲や深度が深い/浅い

##### 受傷の部位

頭部・顔面の中でも特に危険な部位への傷がある

##### 帰宅拒否の程度

養育者との接触を拒絶する帰宅拒否/深刻度の低い帰宅拒否

##### 被虐歴・通告歴

過去の複数の通告歴よりも重篤な通告内容であることから、よりリスクが高まるケース

##### 養育者の態度

過去の経過・関係機関からの情報により介入への拒否感が特に強い